



誰とでも合い、自由に吹ける楽器

バツク

42A & 福田えりみ

(大阪フィルハーモニー交響楽団 首席トロンボーン奏者)

「なんとなくトロンボーンを始め、先生の薦めのままにバツクを吹き始めた」という福田えりみさん。後にトロンボーンの面白さにハマリ、2018年からは大阪フィルハーモニー交響楽団首席トロンボーン奏者を務めている。そんな彼女をずっと支え続けた愛器についてお話をおう。

秋山先生への恩返しのため 先生の希望をかなえたい

トロンボーンを始めたきっかけは？
福田 姉に影響されて小学校の金管バンドでトロンボーンを始めたのですが、楽器が重くて途中でやめてしまいました(笑)。中学に入ったときもなんとなく吹奏楽部に入ってなんとなく

トロンボーンを始めたのです。千葉県柏市の酒井根中学校という、吹奏楽コンクールで何度も全国に行っているところで、私もソロコンクールなどに出させてもらっているうちにトロンボーンが楽しくなってきました。
 中学の先生の紹介で当時NHK交響楽団にいらっしゃった故・秋山鴻市先生のレッスンに通うことになったのですが、最初そんなすごい方

だなんて全然知らなくて、「ダンディなおじいちゃんだな」くらいにしか思っていませんでした。ただの習い事感覚だったのですが、先生が私を気に入ってくださって、思えば中学生の頃から「オーケストラプレイヤーになってほしい」とずっと言われていました。でも当時の私はドルフィントレーナー(イルカ調教師)か幼稚園の先生になりたくて(笑)、トロンボーンは続けながらも、「どうやったらドルフィントレーナーになれるだろう」と考えていました。本当によくわかっていなかったんです(笑)。

そうしたら秋山先生から「やはり東京藝術大学を受けてほしい」と言われて、めちゃくちゃ努力して合格できたのですが、いざ入ってみると周りの人々のレベルの高さと真剣さに「これはドルフィントレーナーを目指している場合じゃない」とようやく気づきました。そして秋山先生が病気をされたことで、自分の気持ちが変わりました。「ここまでトロンボーンを続けられたのは先生のおかげだから、恩返しのために先生の希望をかなえよう」と。

東京藝大では古賀慎治先生、石川浩先生に習いました。秋



福田えりみ(ふくだ・えりみ)

千葉県出身。柏市立柏高等学校を経て、2018年東京藝術大学を卒業。現在、大阪フィルハーモニー交響楽団首席トロンボーン奏者。Trombone Quartet Capriccio、Brass Quintet 粋メンバー。



福田さんの愛器はバツクの42A GB (¥910,800)。「ストラッド」シリーズでハグマンバルブを採用するモデルだ。GBはゴールドプラス・ベルの意味。福田さんは当初「色が可愛いから」という理由でゴールドプラスを選んだが、今は「より落ち着いた音色を表現しやすい」と話す。マウスピースには伊勢の猿田彦神社にある、芸能の神様をまつる佐瑠女神社のステッカーが貼られている。

福田えりみさん

バック「ストラッド」シリーズを
一気吹き!

バックのストラッド テナーバス 42シリーズには、バルブの種類やF管のレイアウトなどによって5つのモデルがある。それぞれどんな特色があるのか、福田さんが「一気吹き」して印象を語った。(今回吹いたモデルは、すべてイエローブラス・ペル)



42B (ロータリーバルブ/トラディショナルラップ) ¥647,900 (42B GL)

「これはめっちゃ吹きやすいです。自分の入れたい息の形がそのまま音になる感じがします」



42BO (ロータリーバルブ/オープンラップ) ¥647,900 (42BO GL)

「クリアな音が出ますね。入れた息を楽器が一度整えてくれるような感覚があるので、息が弱めの人でも、音を飛ばしやすいのかもしれない」



42AF (アキシャルフロー・バルブ) ¥881,100 (42AF GL)

「息が真っすぐに通る印象です。これは、私の42Aを買うときどちらにするかすごく悩んだ楽器ですが、あらためて吹いても私に合っている感じがします。発音の反応もよく、それでいて豊かな響き。F管の反応もよく、ブーンと音が出る印象があります」



42A (ハグマンバルブ) ¥882,200 (42A GL)

「私の楽器のイエローブラス・バージョンですので、もう安定ですね。アンサンブルでもソロでも、何でもできて小回りが利くところが魅力です。アキシャルフロー・バルブの42AFよりはちょっとコンパクトな感じになりますね。もちろん、息の入れ方次第では幅広く鳴ってくれます」



42BOF (オープンフロー・ロータリーバルブ) ¥748,000 (42BOF GL)

「これもすごくよくて、生徒にも薦めています。ハグマンの42Aよりも少しワイドに鳴ってくれて、でもアキシャルフロー (AF) ほどではない。ちょうど中間のよいところの楽器で、大阪フィルに入って「ソリストィックすぎ」と言われたときに買い替えようかと思った楽器です」

※価格はすべて税込で、2024年1月時点のものとなります。

—— 楽器はいつからバックを?
福田 中学までは学校の楽器を吹いていましたが、高校に入る頃に秋山先生の薦めでバックにしました。というか、どういう楽器があるのかさえ知らなかったで先生が選んでくださった候補のなかから42Aを選び、色が可愛かった



誰でも合わせやすく、自由に個性を表現できる。

山先生は難しいことを一切仰らず、私の思うままに吹かせてくださっていたので、古賀先生や石川先生のレッスンで初めて「こういうことも言われるんだ」と思ったことも多かったのです。別の視点からのレッスンは新鮮でしたし、私にかなりとんちんかんなところがあったにも関わらず、優しくしていただきました。
とにかくオーケストラというものをわかっていなくて、高校時代にマーチングの大会で演奏した《展覧会の絵》をマーチングの曲だと思っていたくらいですから。実際にオーケストラのオーディションを受けるようになってから、どうやって吹けばいいか全然わからなくて、検索してオーケストラの曲をたくさん聴くようになりました。

のでゴールドブラス (GB) にしました。東京藝大に入ってから楽器の知識も増えましたが、あらためてバックの魅力にも気づき、結果ずっとバックを吹いていますね。
バックの一番のよさは、「誰でも合うこと」だと思います。これまでいろいろな楽器を使っている人と一緒に吹いてきましたが、合わなくて困ったことは一度もありません。響きが大きいというのでしょうか、軽く明るめの音色の人でも、重めでずっしりとした音の人でも、私がおおよそ吹き方を考えるだけで合わせられます。今はオーケストラで一番を吹いていますが、どんな人が下に来ても全然問題ありません。響きが広いので、アンサンブルしやすいんです。もう一つは、大きな音を吹いても破綻しないで、よい音のままどこまで行っても勝てないところ。男性の肺活量にはどうやっても勝てないけれど、対等でしたかったので、効率よく吹くやり方とか、大きな音量の感じをどう出すかいろいろ工夫して変わってきました。それで自分が変わる楽器もそれに付いて来てくれるんです。
大学を卒業する2018年から首席を務めている大阪フィルハーモニー交響楽団は、伝統的

にブルックナーなどの大編成の曲を演奏する機会が多いのですが、最初は自分だけ強い感じで目立ってしまったんです。それを、広い絨毯のようにオーケストラを包む響きに変えてきました。吹き方をいろいろ研究しましたが、その反応をわかりやすく出してくれたのも、この楽器でした。
一方でソロを吹くときには、細かいリリィスやアタックなどの変化に繊細に反応してくれれます。この間アッペルモントのトロンボーン協奏曲《カラーズ》を吹いたときには、「まるでトロンボーンがおしゃべりしているみたいだった」という感想をいただきました。それは私が目指していたことだったので、とても嬉しかったです。
——では、全員がバックのトロンボーンを使っているバックボーン・ジャパンでは?
福田 さっき言ったことは逆に、同じバックを吹いていても、吹く人の個性がよく出ていると思います。そういう意味で、バックって吹いていくと自由な感じがするんです。楽器が演奏を決めてしまうようなことがなく、きちんと反応してくれるんですね。だからバックボーンで吹いていると、ソロのときなど吹く人の音

楽性がよく表現されている感じがすごくします。録音の際プレイバックを聴くと、誰が吹いているのかすぐわかるくらいです。でもそれでいて一緒に吹いたときにはすごくよく響いてくれるんです。
この楽器をずっと使い続けてきて本当によかったと思っています。



バックのTbについてはこちら

